

相馬市長による講演「相馬に学ぶ」ー東日本大震災 相馬市の対応ー

日時 平成 23 年 9 月 26 日(月)14:30～16:00

場所 小田原市役所 7 階大会議室

【立谷相馬市長講演】

- ・相馬市の経験をみなさんにお伝えして、皆さんが安全安心をどう考えていくか、その助けになればと思う。
- ・小田原が震災に遭うことがあれば、我々が来る。そういう覚悟でいる。いろいろお世話になった皆さんに対して、相馬市は応えていく使命がある。

《以下スライド説明》

- ・スライドNo.2. 相馬市の航空写真で中村城がある。相馬藩の城下町。相馬藩は千葉県の豪族、源頼朝の家来で、それまで律令制の中央集権の時代から、日本を変えようということで革命をしているが、挙兵に相馬藩の先祖が加わったところから始まる。鎌倉幕府ができたとき、褒美として現在の相馬地方の地をもらった。そのとき、千葉一族は「相馬」という地方に住んでいて、下総の国の地名だったが、南北朝の時代に千葉県から引っ越してきた。千葉という苗字ではなく、ふるさとの地名の「相馬」を苗字にした。700 年前の話。
- ・小田原にも歴史があるが、小田原と相馬の違いは国替えがあったかどうか。鎌倉、室町、江戸時代と国替えがなかったところが 3 つあり、それは島津、南部、そして相馬。
- ・700 年の間いろいろなことがあった。天明の飢饉では領民が半分になった。そのとき二宮尊徳先生の報徳仕法を取り入れたのが相馬藩士の富田高慶。尊徳先生の一番弟子で、尊徳先生の娘を嫁にしているくらい。天明の飢饉から立ち直らせるためには報徳仕法しかないということで、相馬藩主が命令した。
- ・富田高慶が 1845 年、一般的な報徳仕法より 10 年遅れるが、試行錯誤を踏まえて報徳仕法が始まる。小田原とは兄弟ということ。
- ・この写真は相馬の全体像。谷間に田んぼがあり、堤がある。これは今に残る報徳仕法の名残。今から 170 年前になるが、報徳仕法を受け継いで、いかに暮らすべきか、いかにして子孫達に実績を残すべきか、真心をもって暮らすべきか。相馬は報徳仕法が残る土地柄。
- ・今回そこに地震と津波が襲った。中村遷都の 400 年目に地震と津波にあった。私は市役所にいたが、最初地震がきて、市長としてやらないといけないことは、家が倒れるので、下敷きになっている人を助けなさい、津波が来るので、海岸部の人を逃がしなさいということ。内陸部の消防団には倒壊家屋の下敷きになっている人を助けなさい、海岸部は避難させなさいと。気象庁では 3m の津波ということで、それでも大変なことだが、実際は 10m の津波が来た。
- ・災害対策は次の死者を出さないということ。
- ・スライドNo.3 指示したのは倒壊家屋の生存者、津波避難の指示、医療機関、学校のチェックなど。
- ・スライドNo.4、5。どんどんと報告が入ってくる。どんどん、ホワイトボードに書いていく。
- ・スライドNo.6.そこに津波が来た。ビデオを見てください。
- ・漁師は船に乗って沖に漕ぎ出す。港に係留していたのでは津波でガチャガチャになる。津波来るが、これを通り越していけば安全。波が砕けるところだと粉々になってしまう。船の高さが 3～4m 程度あるが、それに対して波の高さは 10m。ほとんどの船は助かったが、波に飲まれた漁師もいた。しかし戻ってくる港がない。3 日後に戻ってくるが、想像を絶する光景が待っていた。
- ・スライドNo.7,8.私は、海岸部の小学校、公民館等を避難所に指定したが、それが間違いだった。孤立していて物資をもっていけなかった。

- ・スライドNo.9。被災の後、対策本部でやることをまとめていく。大事なことは次の死者を出さないこと。避難所に入れば、助かったということで、助かった方々を住民基本台帳と突合した。
- ・市内のライフラインは駄目だった。給水車が1台しかなく、次の日の朝、流山市、稲城市、裾野市から支援があったが、東北地方の自治体は駄目だった。
- ・ジャスコと協定を結んでおり、すぐに相馬市が全部押えたが、それは幾ばくかしかない。断水している市民に対して水がない状況だった。市役所内の小銭を全部集めて、自動販売機で買って来いと指示した。
- ・スライドNo.10。市内の小学校を避難所に指定した。体育館に300人、一般の教室を含めると800人が入った。
- ・スライドNo.12。真夜中になって、今の問題はなんだということをもとめ、情報を共有していた。
- ・スライドNo.13。朝の3時で第4回の本部会議を開催。これからやることをみんなで共有するというので、1枚のシートにした。
- ・スライドNo.14。孤立者をどう助けるか、ヘリ、ボートなど。避難所の人は薬も持っていない。水が一番大事。水分と冷たくさせないこと。次の日の食料になるが、「朝食」と書いている。毛布なんかないので、広報車で被災していない市民から毛布のカンパということで集めた。
- ・被災した夜なので、どういう方向で動いたらいいか、瓦礫の撤去をしないと。でも瓦礫の山。孤立者のところに行きたくても撤去しないとイケない。重機はどこにあるなど。
- ・朝になったらアパートの争奪戦になると考え、不動産屋に行って空いている部屋を押さえた。また仮設住宅も奪い合いになる。それなら相馬市は最初にということで、ここに何戸ということで仮設住宅の設計の指示をした。考えられるだけのことを考えた。それを副市長が担当課に割り振り、分担してやるぞということを決めた。棺桶も発注。『市長何個か?』と聞かれたので、500といったらなんとか当たっていた。
- ・こういうことを方向性を一つにし、共有しながら、その時その時必要なことを確認しながら進めていった。
- ・スライドNo.16～19。現地を視察して撮った写真。私の携帯電話で撮った。道路の上に船。私の実家は味噌醤油製造元だが流された。この写真は携帯でNHKに転送した。田んぼの上に瓦礫。
- ・スライドNo.20。避難所の状態はこういう状態。3.12、早くも相馬市のご婦人たちがおにぎりをにぎってくれた。
- ・スライドNo.21。3.13には孤立者はいない。津波の水のなかで生死をさまよう人がいない、これが最初。次は避難所に入った人から次の死者を出さないのが目標となる。
- ・スライドNo.22。原発騒動について。40kmあるので相馬市に爆風はこない。核爆発ということはないが、放射能が水素爆発と一緒に物質が撒き散らされる。死の灰と一緒に。死の灰は来るだろうということで、災害対策を進めた。
- ・何が困ったかという、3.12から放射線量を測り始めた。逃げるのは実は大変なこと。放射能から逃げるときは災害弱者から、寝たきり老人、入院患者からということ。今回、原発からの放射線で死んだ人は誰もいないが、避難騒ぎで死んだ人は何百人という。病人を置いて逃げると、医療がなくなり死に至る、そういう犠牲者もでる。
- ・相馬市は、避難しないとイケない状況になった時は災害弱者からということで、自衛隊の体制をつくった。消防団の体制もつくった。入院患者など800名の逃げる場所も決めていた。
- ・スライドNo.23。一番の理由は放射線。放射線が怖いということで、相馬に来たがらない。怖い量ではないが、医薬品が来なくなった。人工透析は毎日だが薬が来ない、困った。どうしたか。東京までトラックを仕立て取りに行った。タンクローリーでガソリンを取りに行った。食料も。
- ・こんなときに文句いっても何もならない。いろいろな姉妹都市の皆さん、小田原市からも物資が届いた。それで生きながらえた。
- ・スライドNo.24。医療支援も、避難所から死者を出さない、これが基本。健康障害を防ぐ。日本医師会、DMAT、

東京医大などに電話して来てもらった。避難所に 4000 人いたが、死者は出さなかった。

- ・スライドNo.25、26。国から避難指示が出たら災害弱者から。物が無いから逃げろという考えは採らない。それは国が決めるから、籠城するつもりで頑張ろうということ。それでも隣町から原発避難者が入ってくる。廃校の学校を開けながら耐え忍ぶ。
- ・スライドNo.27、28、29。精神病院が閉まった。これは大変。管理すれば生活できるが、薬が届かないので、薬を集めてきた。しかし、調剤の薬剤師がいない、処方する医者がいない。医者連れてきてしのいだ。福島医大とチームをつくってやってきた。心のケアチーム。一般の避難者もダメージを受ける。
- ・スライドNo.30。一人に 3 万円の支援金を出した。これは市役所に来てくださいということで、生きていることの確認になる。住民基本台帳と突合し、生存の確認をすること。自治体は、戸籍の番人から始まっている。生活支援金を出しながら情報をまとめていく。
- ・スライドNo.31。被災した翌日に申し込んだ仮設住宅。
- ・スライドNo.32。次の死者を出さないということで、経済自殺が問題になる。船のローンがある、津波で家が亡くなった人もローンがある。法テラスで無料相談所をつくった。
- ・スライドNo.33。子ども達が心に傷を負っている。PTSD 対策でチームをつくった。教育委員会の別立てでつくて、臨床心理士など子どもの個別指導をしている。
- ・スライドNo.34。震災孤児へのお金は小田原市に相当支援していただいた。浜の消防団には市民を逃がせと言ったが、そのおかげで 9 割の人が助かったが、消防団 10 人が帰ってこなかった。私が命令して申し訳ないことが一杯ある。一緒に逃げないといけませんが、誘導をやらないと、ということで家族の制止を振り切って出て行った。亡くなった消防団員には 11 人の子どもがいるが、その子たちを何とかしないとけないということで、18 歳まで仕送りをすることにした。
- ・親を無くしたのは消防団員だけではない。51 人。18 歳になるまで 3 万円の仕送りを考えていたが、お陰様で、見込みの 1.1 億円を突き抜けている。このお金は全額、彼らの奨学金にする。消防団員が生きていたら、何を考えたか、きっと子どもたちのことを考えていたはずなので、経済的に支援するだけではなく、強く生きるために教育支援を考えている。全員が大学に行けるよう学資にする。
- ・もう一つの問題は、学資は集めても、大学にやるのに勉強をさせないとけない。宮城教育大学の学長と相談して大学院生を勉強支援に呼んでいる。子どもたちをどうしても大学に行かせたい。勉強させるのに文部科学省にお願いした。フォロワーチームの事業に学力向上を入れた。
- ・スライドNo.35。仮設住宅は順調にできて、6.17 に避難所を閉鎖している。
- ・スライドNo.36。次の死者を出さないということは、孤独死をどうするかということ。4.25 から学校が始まったが、避難所から臨時雇用して、学校給食施設を使って避難所のご飯を作ってもらった。仮設住宅に入っている方の夕食を作って配給制にした。一人きりになっている人がいる。93 歳の男性。家族は亡くなり、93 歳のおじいさんだけ助かったという方もいる。孤独になった人は集会所で晩飯をとる。そういう事業をやっている。
- ・スライドNo.37。仮設住宅のマネジメントは重要。健康診断をやるということ、問診票が全員に配れないといけない。実験するのに鈴廣さんに助けてもらった。かまぼこを 4000 人分いただいた。何で 4000 食だと聞かれたとき、我々の仮設住宅はこういう体制ですということ話をした。80 世帯ごとに集会場が 1 箇所ある。それをひとつのコロニーにして、組長にもっていき、戸長に配ればいい。組長は 15 人。組長会議にもっていきとそれぞれが 80 個をもっていき、戸長が 5 個を配る。理論的には 1 時間、2 時間で配れるが、実際やってみて、2 時間で全部いった。このようなマネジメント体制で行っている。
- ・スライドNo.38。孤独の方が仮設をでても共同で生活する。
- ・スライドNo.39。瓦礫処理は、時間かかるが、被災地の中では進んでいる方である。

- ・スライドNo.40。もう一つ、相当なヘドロがきている。津波が来たら気をつけないといけない。相馬市は、コンクリート瓦礫 2 万トン。家の材木などの瓦礫で 23 万トン。ヘドロは 160 万トン。ヘドロにどんな危険があるかわからない。被災地で気を付けるようになった。対策としては、ヘドロの作業領域と生活領域を分けた。服を着替えるなど。東京大学の渋谷教授の考え方で、これを WHO で発表するという。
- ・スライドNo.41。小田原の方に片付けの仕事をやっていただいた。現在、相馬市役所には支援をいただいた人の名前を張っている。
- ・スライドNo.42、43。現在復興計画をつくっていく。相馬のモデルパターン、誰が考えてもこうなるが、第 3 次予算がどうつくかが鍵。特区支援がどこまでかということもある。
- ・スライドNo.44。稲城市と 9.26 に協定を締結した。
- ・スライドNo.45。はらがま朝市では市民の有志がよく頑張ってくれた。彼らは魚の仲買業者だが、震災で商売にならないので、全国から海産物を集めて朝市を開き、被災者や市民に販売するという運動を始めた。今は NPO に認定された。こういう活動をしてくれたことは次のステップに生きている。
- ・スライドNo.46。仮設住宅での孤独死を防ぐために、リヤカー 16 台を買った。16 人の販売員を被災者から雇った。1 日 8 時間リヤカーを引いて戸別訪問販売をした。仮設住宅でノックして販売。1 日 1 回は会話をしよう。リヤカーを二人で引っ張ると会話が成り立つ。このリヤカーで何を売るかというと魚と野菜。しかし、それだけではすまない。シャンプーがないと言えば、朝市にはないから、スーパーまで行ってそろえる。こうして仮設の人を支えている。何よりも大事なのが会話とコミュニティである。失われつつあるコミュニティをつなぐのは人。報徳仕法もコミュニティ。これは相馬市が学習したこと。コミュニティは大事。
- ・スライドNo.50～59。あとは、放射線の問題。相馬市では、PDCA サイクルを徹底して、測定し、高いところは除染、そしてまた測定する。1kmメッシュ調査。ホットスポットは相馬市にはないが、学校は 50 箇所測定している。高いところは土を削る。飯館村の隣の玉野地区では、10mメッシュで全部測る。除染してまた測る。玉野地区には全戸に高圧洗浄機を買った。どこまでだったら安心という答えがない。ゼロはない。ゼロでなくてもいい。どこまでなら安心という区分をつけられないといけないが、その基準がない。だから、相馬市は徹底的にゼロに向かってやっていく。
- ・調べたら記録を残し、高いところは除染する。この繰り返し。学校も、市で方針を決めて、3 点セットで除染対策をやっている。放射能の問題はいろいろな国際問題でもあるが、やれることは全部やろうということ。健康被害、災害対策は次の死者を出さないためにやれることを全部やる。
- ・健康診断も、福島県がやるといっているがやらないので、やっている。
- ・スライドNo.60～65。被災直後の写真。今はこう、次、道路にのった船が、今はこう。いさみやの旅館、今はこう。このように着実に復興している。これは海の近くの旅館街だが、こうなるまでに小田原市に皆さんにお世話になった。
- ・スライドNo.66。特に二宮尊徳のご縁、「推譲」でお世話になってきた。感謝を申し上げる。今後は、相馬市はこうやったなどの情報共有しながら、助け合い、相馬市と小田原市が共に安全安心に取組んでいければいいと考えている。

【立谷相馬市長・加藤小田原市長対談】

《加藤市長》

- ・本日、相馬市との協定の締結式をさせていただいた。
- ・3.11 という想像をはるかに超えたなかで陣頭指揮を執ってきた立谷市長にお話をいただいた。住民の皆さんの想いを受け止めて、息の長い支援活動をやっていきたい。そして、今日は、災害への備えを実践に通じる

ものとして学ばせていただく機会をいただいた。

- ・これは、立谷市長からの申し出によるもの。今日は、スケジュールもあり、長く引き留めができないが、私が皆さんに代わって2つの視点でお話をお聞きする。
- ・協定締結の趣旨は、尊徳の縁で、今の局面では復興の1合目、2合目かもしれないが、長い道のりを進めていくなかで、身近な関係のなかで聞きたいと思う。まず、市民と共に復興に向けて取り組むのに必要なものは何か。

《立谷市長》

- ・一番は、半年間こういう想いをしながら、地域のコミュニティについて話した。地域の中のコミュニティ、市と市の関係もそう。振り返ると、相馬市民の民族性を感じる。避難所は整然としていた。賢い、けんかをしない。けんかするとみんな不幸になるのがわかっている。これは賢いと思いながら見てきた。賢さや整然とした立ち居振る舞いは報徳仕法が大きかったと思っている。
- ・こんなことがあった。水源地は、全村避難した飯館村にあるダム湖で、相馬の生活用水の7割を引いている。不安で仕方がなかった。ダムからセシウムが出たら飲ませる訳にはいかない。水のペットボトルを集めたが、それが240トン。1人あたり15リットルあるが、水が汚染されることはなかった。
- ・鈴廣さんのかまぼこと一緒に、それをどう配るか。お米は1世帯10kg配った。1回目はけんかになったが、そうならないようにチェックした。1回目、2回目で米を配るのは、ペットボトルの水を配る訓練だった。何かあったらを考えるのが災害対策。1回目の経験から学習して2回目は整然と配ることができた。
- ・相馬の民族性。小田原にもそういうところがあると思う。これから小田原市の皆さんと地域間交流をさせていただきたいと考えている。同じDNAを持っている。被災した孤独老人のための共助住宅をつくる。私は、老人保健施設を運営しているが、100床で1人30万円かかる。30~40歳代で可処分所得が30万円あるかどうかだ。一般の施設と家庭の真ん中が無い。報徳先生の教えでこれをやっていく。一緒になって。

《加藤市長》

- ・仮設住宅の建物のあり方、孤独化するなか、まわって関わる仕組みをつくっている。小田原市の市民ボランティアに今後担ってもらう支援として、仮設住宅のみなさんへのコミュニティづくり。つまり、普段と同じように暮らせるための支援をと考えていたが、住民の皆さんが動かれている、さすが。
- ・いざというときに、心がぶれずに立ち回れる。地域の精神性、文化、そういうことを報徳で育ててきた。

《立谷市長》

- ・小田原市に感心しているのが、相馬市に支援してくれた市町村は沢山あるなか、小田原市の場合は、市長以下、総じてこういう風にしよう、小田原市としてこうしよう和一貫して行動していること。たまたま、そこに相馬があったということ。報徳仕法のDNAとなると南相馬、飯館もあるが、特別の関係ということを差し引いても、小田原市は「他人事ではない、我々がこうなったときどうするか」というものの考え方を持っている。このような自治体は、知っている限りでは小田原市以外にはなく、敬服に値する。

《加藤市長》

- ・今日は、自治会連合会長、民生委員、防災リーダー、職員、一般の方に来ていただいているが、災害とはきいてもきれない地域の方々に、災害に対する思いは大きい。地域の結束で、沿岸部の方は津波対策をやっている。そういう思いも持ってやっている、他人事ではない。二宮先生の教えを共有している。
- ・ちなみに、日赤への募金は1.2億円、これは自治会の皆さんが主に集めていただいている。震災遺児の義援金は、今日で1,000万円を越えている。今後、今回の協定で相手をはっきりしてきたなかで支援して学ばせていただきたい。逆に支援が必要なことは、遠慮なく申し出をしてほしい。
- ・後半、小田原の話を。

- ・総括として、地域の絆がいかに大事かということ、実感を持って話をさせていただいた。
- ・小田原の防災対策のなかで、喫緊の課題は避難経路をつくらないといけない。こうした作業をやっていくことが顔の見える関係づくりにつながるので、高齢者の方に緊急要請カードを配っている。災害対策のなかで地域の絆を深めていく作業を進めている。
- ・それぞれの皆さんに、こういう視点でやったらというメッセージがあれば。

《立谷市長》

- ・データベースが大事。津波が来たとき、我々が持っているデータベースに連絡する。〇〇には寝たきりの人がいる、おじいちゃんを3階まで上げたが、担いで逃げないといけない。救急車といってもしょうがない。地域の人がやらないといけない。
- ・今は全ての寝たきりの人のところに担架を置いている。誰がその担架を担ぐかを決めたい。車で助けてもらおうとしても遅い。
- ・我先に逃げるので、災害弱者から系統的に逃がすというルールをつくっておかないと。相馬市は消防団が確保できるからいいが、あてになるのは消防団員。実は、相馬市では、去年、一昨年と図上訓練をやっていたので私が慌てることがなかった。ままごとではなく、何がおこるかわからない、コンピューターが事象を出す。震度6の地震、この家が倒壊、シナリオの無いシミュレーションを3時間やる。
- ・私はくたくたになる。市長是非やってください。市長がのた打ち回る。司令官はそういうもの。市長がすることは、「判断」ではなく「決心」すること。「判断」はみんなで作るもの。市長の肝試しをみんなで作ってほしい。そうやることで市長の気持ちを皆で共有できる。夢かうつつかわからなくなる。車同士が衝突してわからない。複雑骨折、トリアージなども、こっちはほっとけとか。市長が判断の重大さにみんなも気付く。

《加藤市長》

- ・やってみたい。

《立谷市長》

- ・要援護者の対応はぜひ地域で。相馬に津(つのみつ)神社の話がある。
- ・ひいおばあさんの言い伝え。原釜地区にある神社。津が満つる。波打ちがここまでくるといって言い伝えで、津波は神社まで逃げれば助かるということ。実家は弟が継いでいたが、ひいおばあさんの教えで神社まで逃げて助かった。
- ・相馬藩では1611年に津波が来ている。相馬藩の記録では700人が溺れ死んだ。富岡、双葉まで領土だったが、おそらく相馬では100名くらい。相当な数の漁師が死んだが、そこまで逃げたおかげで助かった。
- ・原釜の海岸を天皇陛下が通られたとき、『津神社見えますか』と言われた。陛下も興味を示されたが、言い伝えは日本のいたるところにある。小田原にも先祖の知恵がある。先祖は「ここは駄目だぞ」とおっしゃったが、それを忘れてしまう。新たな津神社をつくることをお勧めする。

《加藤市長》

- ・子どもにも分かるかたちで、地域で共有することが大事。原釜には2回行ったが、森が見える。そういう場所が必要。子どもにも分かるようにしていくことが私たちに出来ること。

《立谷市長》

- ・マンションに逃げるとき入れてくれるか。

《加藤市長》

- ・了解が得られたところと協定を結んでいる。自治会が中心となってやっている。

《立谷市長》

- ・基本は、地域のコミュニティ。

- ・相馬市では、半年間の中間報告を冊子にされている。今回の大変なさなかに伝えなければならないことをまとめている。非売品。
- ・小田原市に 300 部寄贈する。皆さんで活用していただきたい。

《加藤市長》

- ・これは、詳細に書かれている。連合自治会長さんにも、テキストとして使っていきたい。
- ・これは情報だが、小田原城で開催する産業祭りに、はらがま朝市がお越しいただけることになった。ご恩に報いたいということで、銅門広場にこられる。
- ・また、全ての皆さんが参加できる場ではないが、10月5日の自治会連合会長会議に相馬市の行政区長会長が来られる。近いところで、市長、はらがま朝市、連合など、協定を皮切りに関係をつくっている。話を自分事として学ばせていただくことは、災害という切り口だが報徳の縁は兄弟ということ。災害だけではなく、広い意味での地域づくりを分かち合えるように、そういう視点で交流いただければ。
- ・最後にメッセージを。

《立谷市長》

- ・ありがとうございました。今日、防災協定を結ぶことができた。私としては、小田原市から受けたご恩をどう返していくか。それは相馬市の復興が一番だと思う。また、私たちの体験を共有して、相馬市が強くなると同様に小田原市にも強くなっていたいただきたい。
- ・報徳博物館を拝見したが、先祖が苦勞してきたこと、大事にしてきたこと、そういう目で新しい時代をみていかないと、ということを強く感じた。相馬市は頑張っていく。何より、これからは災害対策を共有する、地域の成長も共有する、そういう関係を築いていく。小田原の皆さんも加藤市長を中心に頑張っていたいただきたい。

以上